


 書評

傳田健三 著

小児のうつと不安

診断と治療の最前線

齊藤万比古

本書は、論旨の明快な理解しやすい書であり、その意味で学術書である前に啓発の書であると言えるだろう。第1章「小児のうつ病」の最初の論文である「I. 小児のうつ病は見逃されてきた」の題そのものに、本書の主張は明らかに示されている。すなわち、DSM-III以降の成人のうつ病診断用の基準を子どもに適用しても、大人のうつ病と同質な症状群を抽出することができるという「取り決め」と、20世紀末から隆盛を誇る抗うつ薬のSSRIの小児への適用拡大という2つの潮流が大きくなねりとなって「小児のうつ」という概念を際立たせてきた近年の欧米の動向を、わが国に紹介し導入しようとする姿勢を本書は意欲的に示していると評者は感じた。第1章の「IV. 症例提示」で示されている症例Aは大うつ病性障害の症例、症例Bは気分変調性障害の症例、症例Cは摂食障害と合併した軽症うつ病症例で、いずれもSSRIないしSNRIの投与により劇的に改善している。こうした症例から著者は、子どものうつ病の薬物療法における第一選択薬をフルボキサミンとして、薬物療法と認知行動療法との併用を推奨しているのはその好例であろう。

本書の後半は第2章「小児の不安障害」である。子どもの発現する分離不安障害、パニック障害、社会不安障害、強迫性障害、外傷後ストレス障害について要領よくコンパクトに論述した論文が並んでおり、このまま子どもの精神医学を学ぶ専門家のテキストとしても使用できる内容となっている。

しかし一方では、前半のうつ病と後半の不安障害の2つの章を読み比べ、評者はどこか両者

の違いよりも共通性が見えてくるという思いを禁じ得なかった。これはもちろん著者のせいではなく、うつ病にしても不安障害にしても、子どもにおける概念が大人のそれをあてはめるだけではどうしても納まりきらない、アモルファスな特質を持っているという理由が大きい。大人に生じる問題を規定した疾患概念で子どもの精神疾患が規定できるというのは、やはり「取り決め」であり、疾患によってはそれがうまくはまらないものも存在する。その代表的疾患がうつ病と不安障害かもしれない。

臨床家の感覚として、症例Aのような大うつ病的な子どもの治療に著者と同じような治療を行いながら、なかなか治療効果を挙げられなかったり、症例Cのような症例でうつ病症状は比較的速やかに改善しながら、その後に長期にわたる神経性無食欲症の治療が続いたりする症例も多数あることを知っている。いまや、そのような症例を含んだ子どものうつ病や不安障害を、発達途上にある心身に起因する非定型性や流動性を織り込んだ統合的な疾患概念の中に位置づけるべきときなのである。さらに言えば、うつ病と不安障害にとどまらず、子どもの精神疾患の全体を大きく規定し得る包括的児童青年精神医学の体系を、私たちはこの国の子どものために探求し策定するよう強く求められているといっても言い過ぎではない。本書は、テキストとしてだけでなく、以上のようなことを考えさせてくれる良書である。

(国立精神・神経センター国府台病院精神科)

●B5 125頁 2006 定価3,465円(本体3,300円+税) 新興医学出版社